東京学芸大学紀要　5部門　45　pp.143～152, 1993

ドロップアウト，トランスファー，継続者の負事態における帰属様式の比較*

鈴木　康弘**・杉原　　隆

健康・スポーツ科学

(1993年6月10日受理)

1．緒　　言

1．1　ドロップアウトに関する研究とその問題点

近年スポーツは，合理主義・効率主義的な社会の中で失われてきた人間性の回復を担う可能性を持つものとして注目され，生涯スポーツの重要性なども指摘されている。しかしながら，その反面，スポーツ活動に参加しても離脱していく者が少なくないこともまた事実である。

組織的なスポーツ活動からの離脱率の高さを問題視した北米では，1970年代から研究が始められ，Orlikをその先駆的研究者として様々な研究が行われてきた。Orlik（1974，1975）[11)12)]は，「過度の競争性を持つプログラム」「他の活動への興味」「コーチの問題」「他のスポーツへの興味」などがスポーツからの離脱理由であると報告し，加えて，中学生は主に「勝つことへの執着（勝利至上主義）」を嫌い離脱するが，高校生になると，「他の活動への興味」がその主な離脱理由になるという発達的な変化も報告している。

スポーツからのドロップアウトの問題を扱った初期の研究は，離脱者を対象に質問紙やインタビューなどを実施し，自己報告によって離脱理由を明らかにしていくという手法で行われた。その結果,「他の活動や他のスポーツへの興味」(e. g., Orlik, 1975[12)]; Mcpherson, 1980[10)]; Gould et al., 1982[3)]; Klint & Weiss, 1986[8)]),「コーチの問題」(e. g., Orlick, 1974[11)]; Mcpherson, 1980[10)]),「練習の厳しさ」(Orlik,1975[11)]),「時間の問題」(Mcpherson, 1980[10)]; Klint & Weiss, 1986[9)]),「楽しさの欠如」(e. g., Gould et al., 1982[3)]; Klint & Weiss, 1986[8)]),「上手にできない，能力を発揮できない」(e.g., Gould et al., 1982[3)]; Klint & Weiss,1986[8)]; Burton & Marten, 1986[2)]),「けが」(Klint & Weiss, 1986[8)]) などの離脱理由が見いだされている。一方，継続者と離脱者を比較し，離脱を規定する要因について検討しようとする研究も行われており，離脱を規定する要因として「チームへの所属感が低い」「自分の行っているスポーツを楽しくないと感じている」「重要な他者である父親の励ましが少ない」「コーチを専制的であると感じている」

---

* A Comparison of Sportsdropout, Trasfer, and Continuator on the Attributional Style in Bad Events: Yasuhiro SUZUKI and Takashi SUGIYAMA

(Department of Health and Sports Sciences) (Received June 10, 1993)

** 湘北短期大学非常勤

「失敗を能力へ帰属し，成功を努力へ帰属しない」(Robinson & Carron, 1982[14])，「部機能の低下」「技能向上の停滞」「非レギュラー」(稲地ら，1992[5])，「レギュラー状態」「厳しさ」「感動経験」「指導者への満足度」(青木，1989[1]) などの要因が抽出されている。

しかしながら，これまでのドロップアウトに関する研究では，要因の抽出が探索的であるがために，抽出された個々の要因が，相互にどのような関係をもっているのか，また，なぜ離脱行動にこれらの要因が影響を及ぼすのかは明らかにされておらず，これらの統一的な解釈は不明瞭なままとなってしまっている。これは，Klint & Weiss (1987[9]) が述べるように，ドロップアウトについての研究が理論的な背景をもたずに行われてきたことに原因がある。

また，ドロップアウトについての研究が進められていく中で，離脱後に離脱者がとる行動によって，「いままで行ってきたスポーツをやめて，その後二度とスポーツ活動には参加しないタイプ」と「いままで行ってきたスポーツはやめて，他のスポーツを行ったり，異なるレベルの同一のスポーツへ移るタイプ」の二つのタイプのあることが明らかになってきた。(e. g., Orlick, 1974[11]; Klint & Weiss, 1986[8]; Gould et al., 1982[3]; Mcpherson, 1980[10])。そして，Klint & Weiss (1986[8]) は，スポーツから離脱したものを一律的にドロップアウトとして捉えるのではなく，前者をドロップアウト，後者をトランスファーと定義し，区別する必要を指摘している。しかし，これまでの研究では，トランスファーはドロップアウトの中に含まれて処理されているものがほとんどである。したがって，これからのドロップアウト研究では，ドロップアウトとトランスファーを区別し，なぜ，あるものはトランスファーに留まり，あるものはドロップアウトしていくのかといった観点から検討をしていくことが必要であると考えられる。

1．2　ドロップアウトと帰属様式

過去のドロップアウト研究では「自分が思っていたように上手にできない」(e. g., Gould et al., 1982[3]; Klint & Weiss, 1986[8])「従事している競技の中で自分の能力を高く示すことができないと考えている」(Burton & Marten, 1986[2])「失敗を能力へ帰属し，成功を努力へと帰属しない」(Robinson & Carron, 1982[14]) といった離脱理由が見いだされている。また，保坂・杉原 (1985[4]) は「練習をしていても記録が向上しないと無力感が形成される」と報告している。そこで本研究では，ドロップアウトの理論的背景を Seligman の学習性無力感に求めた。学習性無力感とは，自己の行動と結果の間に随伴性がないという認知から生じる動機づけの低下，学習の障害，情緒的な障害であり，説明変数として，内的－外的，安定－不安定，全体的－特殊的といった3次元の帰属変数が想定されている。例えば，自分がいくら練習をしても上手くならないといった事態を認知（非随伴性の認知）した者が，その原因を“能力”のような自分の内的な要因へ帰属すると，“運”や“課題の難しさ”などの自分以外の外的な要因へ原因を帰属した者よりも無力感を形成しやすくなるといった考え方である。また“能力”といった内的でかつ安定的な領域への原因の帰属は，“努力”のように同じ内的ではあっても，自分の行動しだいで変化していく可能性のある不安定な領域への帰属よりも，より重篤な無力感を生む。さらに，原因が特殊的な領域へ帰属されれば，無力感は場特殊的なものにとどまるが，全体的な領域へ帰属されれば無力感はさらに般化していくことになるのである。この理論からすると，ドロップアウトやトラスンファーは，離脱理由として挙げられているような，良くない出来事や失敗的な出来事（以下，負事態という）の原因を内的で，安定的，全体的な要因へ帰属する傾向を持ち，従事している活動に対して，なんらかの無力感を形成したために起こる現象ではないかと考えることができる。

1．3　本研究の目的

本研究では，過去の研究で挙げられたドロップアウトの理由やドロップアウトを規定する要因を検討した結果，その理論的背景をSeligmanの学習性無力感に求めた。つまり，ドロップアウトやトランスファーは，離脱理由として挙げられたような負事態の原因を内的で，安定的，全体的な要因へ帰属する傾向を持ち，従事している活動に対して，なんらかの無力感を形成したために起こる現象であると考えた。そして，トランスファーは負事態の原因が内的には帰属されているものの安定的や全体的な要因にまではその帰属が及んでいないために無力感が場特殊的なものとなり，スポーツの種目やレベルを変えるといった行動にとどまり，スポーツ活動から離脱するまでにはいたらない。しかし，ドロップアウトは負事態の原因が内的で，安定的で全体的な要因へ帰属されているためにより重篤な無力感が形成され，やる気を失ってしまうというように考えた。そして，以下の仮説が立てられた。

仮設1．ドロップアウトした者は継続者よりも負事態における原因を，内的，安定的，全体的な要因に帰属する傾向がある。

仮設2．ドロップアウトとトランスファーを比較した場合，内的な次元への帰属においては差が見られないが，安定－不安定な次元への帰属，全体的－特殊的な次元への帰属ではドロップアウトの方がより安定的，全体的な要因へ帰属する傾向にある。

2．方　　法

2．1　被験者

調査は，高校生853名，大学生490名，計1343名に対して行われた。その内，有効回答数は高校生では474名（55%），大学生では293名（59%）であった。

ドロップアウト：運動部を途中でやめ，現在はなんの部活動にも参加していない者。文化部など，運動部以外の活動からの離脱者は含まない。（高校生163名，大学生138名）

トランスファー：運動部から他の種目の運動部へ，もしくは，レベルの異なる同種目の運動部へ途中で変わった者，3種目以上にわたって移動を繰り返しているものは含まない。（高校生159名，大学生80名）

継　続　者　：途中で運動部をやめたり，種目やレベルを変更することなく，継続して運動部活動を行っている者。（高校生152名，大学生75名）

また，経験年数による帰属様式の違いを検討するために被験者を短期経験群（経験年数1～3年，245名）と長期経験群（経験年数4～9年，580名）に分類した。

2．2　調査方法

質問紙は郵送法または直接配布，直接回収によって実施された。

2．3　調査期間

1992年10月から12月

表1：負事態の帰属様式測定尺度の項目

運動部 対 日常	達成 対 感情	質問項目
運動部に関係した出来事	達成的な出来事	(3) 一生懸命に練習をしても，なかなか技能が上達しなかった． (8) 一生懸命に練習したが，十分な報酬（選手に選ばれなかった，試合に勝てなかったなど）が帰ってこなかった．
	感情的な出来事	(5) クラブのことや私生活のことを相談するチームメイトがなかなかできない． (11) 練習方法や部活に対する考え方で監督やコーチまたは親などともめた．
日常生活に関係した出来事	達成的な出来事	(2) 大切な話をしたのに，それがクラスのみんなに受け入れられなかった． (4) アルバイトを探しているのに何回かそれがうまくいかなかった． (7) クラスの人があなたに期待している仕事を，あなたはまったくできなかった．
	感情的な出来事	(1) 友達が問題をかかえてあなたに相談にきたが，あなたはその友人を助けようとはしなかった． (6) 彼（彼女）とデートにいったが，うまくいかなかった． (9) 街で偶然会った友達が，あなたにつめたい態度で接した．

2．4 質問項目

ドロップアウト，トランスファー，継続者の負事態における帰属様式の違いを比較するためにPetersonら（1982[13]）の開発した帰属様式の傾向を測定するための質問紙，Attributional Style Questionnareを参考にして，運動部に関する項目をつけ加え10の質問項目から成る質問紙を作成した（表1）。質問紙は，10の質問項目それぞれについて，その仮設的な出来事の原因の帰属領域を測定する尺度として内的－外的，安定－不安定，全体的－特殊的といった三つの次元の尺度が設けられている。各尺度それぞれは7段階の評定尺度になっており，尺度の得点が高いほど悲観的（内的，安定的，

表2：負事態の帰属様式測定尺度

3. 一生懸命に練習をしても，なかなか自分の技能が上達しなかった．

a)なぜこのようになったのか，あなたが考える原因を一つだけ書いて下さい．

_____

b)（上にあなたが書いた）その原因は，自分自身についての何か（自分の努力とか能力など）によるものですか，それとも自分以外のものに関する何か（指導者，友人，環境，運など）によるものですか．

自分以外の何かによるもの　1　2　3　4　5　6　7　自分自身についての何かによるもの

c)これから先，練習を一生懸命しても上達しなかったとき，その（上ににあなたが書いた）原因が再び心に芽生えてきそうですか．

二度と心の中にめばえない　1　2　3　4　5　6　7　いつでも心の中にめばえそうだ

d)その（上にあなたが書いた）原因は，練習をしても上達しないということだけの問題に関係したものですか，それとも，これからの自分の生活のいろいろなこと（勉強，学校の生活，友人関係など）に影響を与えるようなものだと考えますか．

自分の技能が上達しなかったことだけに関係している　1　2　3　4　5　6　7　自分の生活全般に影響を与える

e)もし，□の中のような状況があなたに起こったなら，それはあなたにとってどれくらい重要な出来事ですか．

まったく重要なことではない　1　2　3　4　5　6　7　とても重要なことである

全体的）な帰属傾向を示す。（表２）

３．結果と考察

３．１　運動部に関係した尺度への帰属様式の比較

被験者の性（男・女），発達（高校生・大学生），経験年数（長期経験群・短期経験群）の影響を考慮にいれ，離脱（ドロップアウト・トランスファー・継続者）×発達×性，離脱×経験×性の２種類の３要因分散分析を行った（表３・表４）。その結果，すべての尺度で離脱の主効果は有意であり，３次の交互作用は有意ではなかった。いくつかの尺度で２次の交互作用が有意であった。内的―外的な次元への帰属では，離脱×性の交互作用が有意であり，ドロップアウトとトランスファーでは男女共に同様な帰属傾向を示すが，継続者では男子は女子よりも楽観的に帰属する傾向が認められた（図１）。全体的―特殊的な次元への帰属では，離脱×性，離脱×発達の交互作用が有意であった。離脱×性の交互作用は，男子のトランスファーが女子のトランスファーよりも楽観的に帰属する傾向を持ち，男子では，トランスファーと継続者の帰属傾向に差がないことを示している（図２）。離脱×発達の交互作用は，大学生のトランスファー，継続者は，高校生よりも悲観的に帰属する傾向を持ち，大学生ではトランスファーと継続者の帰属傾向に差がないことを示している（図３）。また，総合的な尺度への帰属では，離脱×性，離脱×発達の交互作用が有意であった。離脱×性の交互作用では，ドロップアウトは男女共に同様な帰属傾向を示すが，トランスファーや継続者では男子が女子よりも楽観的に帰属する傾向が認められる（図４）。また，離脱×発達の交互作用においては，ドロップアウトやトランスファーでは高校生と大学生の間に差は認められないものの，継続者では大学生が高校生に比べて悲観的に帰属しており，大学生の継続者はトランスファーと同様な帰属傾向にあることが認められる（図５）。安定―不安定な次元の尺度では２次の交互作用は有意ではなく，離脱の主効果についてのDUNCANの多重比較検定の結果，ドロップアウト，トランスファー，継続者の順で悲観的に帰属していることが認められている。以上の結果を総合的に解釈すれば，すべての尺度において，ドロップアウトは継続者よりも悲観的な帰属傾向を示しており，本研究の仮設１は全面的に支持されているといえる。一方，男女別に単純主効果の検定を行った結果，全体的―特殊的な次元において男子のトランスファーと継続者の帰属傾向に差が認められないことから，男子においては，本研究の仮設２を部分的に支持する結果が得られているといえる。女子では内的―外的，安定―不安定，全体的―特殊的な次元各々についてドロップアウト，トランスファー，継続者の順で悲観的に帰属していることが認められており，仮設２は支持されていない。また全般的に，女子が男子よりも悲観的に帰属している傾向は，伊藤（1985[6]）の結果と一致している。伊藤は，研究の中で，「女子の場合には一般的に能力の自己評価が男子よりも低いために，負事態では自己の能力の低さを確認する方向で帰属が行われる」と述べている。女子については，トランスファーや継続者であっても負事態を悲観的に帰属する傾向が高いことをドロップアウト防止の観点から考えれば，女子の帰属については特に注意する必要があるということができる。また，全体的―特殊的な尺度では離脱×発達の交互作用も認められており，発達別に単純主効果の検定を行った結果，大学生のトランスファーと継続者の間に有為な差が認められないことから，仮設２は大学生の帰属傾向では部分的に支持されているものといえる。大学生の継続者やトランスファーは高校生よりも悲観的に帰属する傾向も認められており，主効果でみられる大学生が高校生よりも悲観的に帰属しているという関係は，大学生と高校生のトランスファーと継続者の帰属傾向による影響が大きいものと考えることができる。こ

表3：負事態の内的―外的，安定―不安定，全体的―特殊的な次元に関する尺度についての3要因分散分析の結果（離脱，発達，性）

尺度名		主効果			交互作用		
		離脱 M M M SD SD SD F値	発達 M M SD SD F値	性 M M SD SD F値	離脱×発達 F値	離脱×性 F値	性×発達 F値
運動部の出来事に関係した尺度	内的―外的な次元の尺度	D＞T＞K 5.73 5.15 4.74 0.82 1.04 0.99 74.72 **	大＞高 5.35 5.20 0.91 1.11 4.70 *	n.s.	n.s.	3.97 *	n.s.
	安定―不安定な次元の尺度	D＞T＞K 5.78 5.54 5.06 0.79 0.92 0.97 44.63 **	大＞高 5.63 5.41 0.82 1.00 10.88 **	女＞男 5.59 5.42 0.90 0.95 6.83 **	n.s.	n.s.	n.s.
	全体的―特殊的な次元の尺度	D＞T＞K 5.18 4.62 4.39 1.05 1.16 1.11 37.79 **	大＞高 4.96 4.66 1.08 1.17 14.04 **	女＞男 4.89 4.69 1.07 1.19 6.23 *	4.93 **	6.12 **	n.s.
運動部での出来事に関係した総合的な尺度（上記の3尺度を平均したもの）		D＞T＞K 5.56 5.10 4.73 0.60 0.75 0.74 100.52 **	大＞高 5.31 5.09 0.69 0.81 19.75 **	女＞男 5.25 5.11 0.70 0.81 8.11 **	4.74 **	4.29 *	n.s.
日常生活に関係した尺度	内的―外的な次元の尺度	D＞T＞K 4.81 4.62 4.41 1.02 1.02 0.96 10.32 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	安定―不安定な次元の尺度	D＝T＞K 5.25 5.16 4.82 0.88 0.90 0.90 16.11 **	大＞高 5.27 4.99 0.83 0.94 18.92 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	全体的―特殊的な次元の尺度	D＞T＝K 4.46 4.25 4.16 1.17 1.06 0.99 5.40 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
日常での出来事に関係した総合尺度（上記の3尺度を平均したもの）		D＞T＞K 4.84 4.68 4.46 0.75 0.71 0.69 17.63 **	大＞高 4.79 4.61 0.73 0.74 11.90 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

D:ドロップアウト，T:トランスファー，K:継続者，大:大学生，高:高校生　　** p<.01　* p<.05

表4　負事態の内的―外的，安定―不安定，全体的―特殊的な次元に関する尺度についての3要因分散分析の結果（離脱，経験，性）

尺度名		主効果			交互作用		
		離脱 M M M SD SD SD F値	経験 M M SD SD F値	性 M M SD SD F値	離脱×経験 F値	離脱×性 F値	性×経験 F値
運動部の出来事に関係した尺度	内的―外的な次元の尺度	D＞T＞K 5.73 5.15 4.74 0.82 1.04 0.99 74.72 **	短 ＞ 長 5.61 5.12 0.94 1.04 42.38 **	n.s.	n.s.	3.93 *	3.98 *
	安定―不安定な次元の尺度	D＞T＞K 5.78 5.54 5.06 0.79 0.92 0.97 44.63 **	短 ＞ 長 5.74 5.40 0.88 0.95 22.31 **	女 ＞ 男 5.59 5.42 0.90 0.95 6.83 **	n.s.	n.s.	4.13 *
	全体的―特殊的な次元の尺度	D＞T＞K 5.18 4.62 4.39 1.05 1.16 1.11 37.79 **	短 ＞ 長 5.12 4.64 1.09 1.14 30.01 **	女 ＞ 男 4.89 4.69 1.07 1.19 6.23 *	n.s.	6.03 **	n.s.
運動部での出来事に関係した総合的な尺度（上記の3尺度を平均したもの）		D＞T＞K 5.56 5.10 4.73 0.60 0.75 0.74 100.52 **	短 ＞ 長 5.49 5.05 5.67 0.78 62.67 **	女 ＞ 男 5.25 5.11 0.70 0.81 8.11 **	n.s.	4.17 *	4.95 *
日常生活に関係した尺度	内的―外的な次元の尺度	D＞T＞K 4.81 4.62 4.41 1.02 1.02 0.96 10.32 **	短 ＞ 長 4.88 4.54 0.99 1.01 17.24 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	安定―不安定な次元の尺度	D＝T＞K 5.25 5.16 4.82 0.88 0.90 0.90 16.11 **	短 ＞ 長 5.26 5.03 0.88 0.91 9.67 *	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	全体的―特殊的な次元の尺度	D＞T＝K 4.46 4.25 4.16 1.17 1.06 0.99 5.40 **	短 ＞ 長 4.50 4.24 1.20 1.04 9.18 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
日常生活に関係した総合的な尺度（上記の3尺度を平均したもの）		D＞T＞K 4.84 4.68 4.46 0.75 0.71 0.69 17.63 **	短 ＞ 長 4.88 4.60 0.75 0.72 22.30 **	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

D:ドロップアウト，T:トランスファー，K:継続者，大:大学生，高:高校生　　** p<.01　* p<.05

の結果は，伊藤 (1985[6]) の研究や，伊藤ら (1985[7]) の研究の結果と一致しており，年齢の上昇とともに帰属が内面化，固定化していくことを示唆するものである。したがって，年齢の上昇にともない，より慎重な帰属への介入が必要となるものと考えられる。

また，運動部での出来事に関係した総合的な尺度についての帰属でも女子のトランスファーや継続者の帰属が男子に比べて悲観的なこと，大学生の継続者の帰属が高校生に比べて悲観的なことが認められている。

経験の主効果が全ての尺度で有意であり，短期経験群よりも長期経験群の方が悲観的な帰属傾向にあることが認められている。この結果は，伊藤 (1985[6]) の結果と一致するものであり，この点に関しては，短期経験者よりも長期経験者の方がスポーツを長期にわたって継続していることでスポーツに対して自信を持っているために帰属が楽観的になっているといった解釈が可能である。

3．2　日常生活に関係した尺度への帰属様式の比較

離脱×発達×性，離脱×経験×性の2種類の3要因分散分析を行った（表3・表4）。その結果，2次の交互作用，3次の交互作用は全ての尺度で有意ではなかった。離脱の主効果が全ての尺度において有意であったため，DUN-

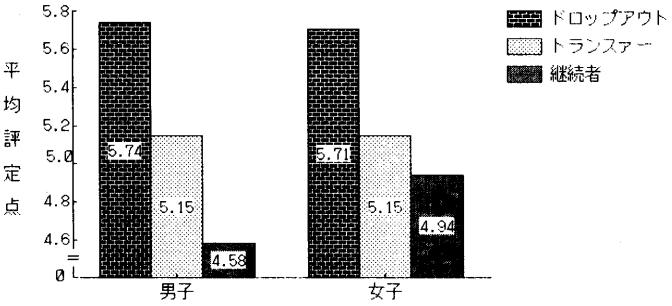

図1　運動部での負事態の内的―外的な次元への帰属に関係した尺度における離脱×性の交互作用

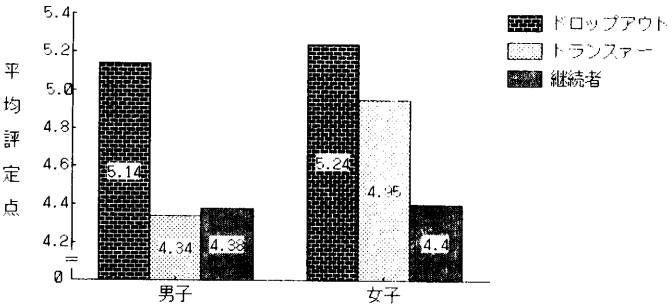

図2　運動部での負事態の全体的―特殊的な次元への帰属傾向に関係した尺度における離脱×性の交互作用

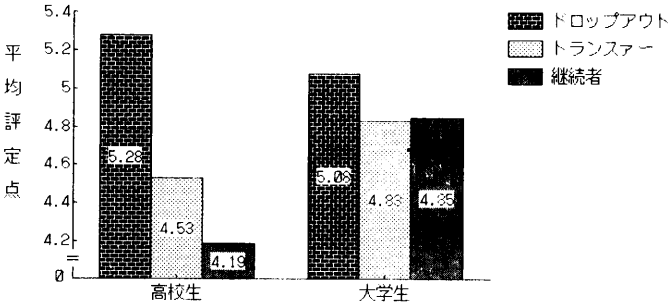

図3　運動部での負事態の全体的―特殊的な次元への帰属に関係した尺度における離脱×発達の交互作用

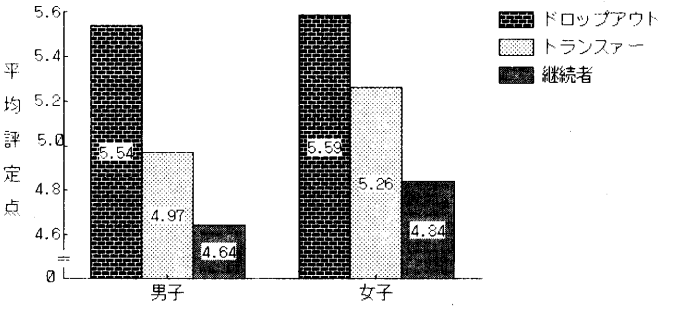

図4　運動部での負事態に関係した総合的な尺度における離脱×性の交互作用

CANの多重比較検定を行った。その結果，日常生活に関係した尺度では全ての尺度で，継続者よりもドロップアウトがより悲観的に帰属しているものの，安定—不安定な次元ではドロップアウトとトランスファーの帰属傾向に有意な差が認められないこと，全体的—特殊的な次元への帰属傾向ではトランスファーと継続者の帰属傾向の間に有意な差が認められれないことが明らかになった。

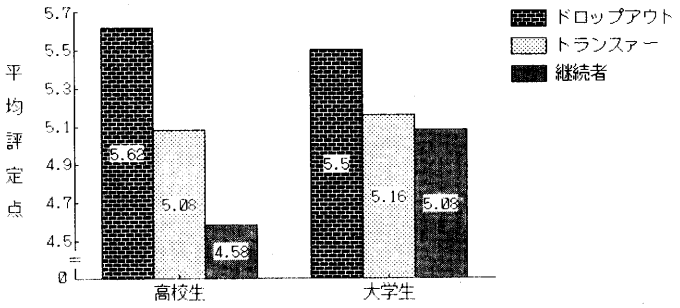

図5　運動部での負事態に関係した総合的な尺度における離脱×発達の交互作用

以上の結果は，本研究の仮設1を全面的に支持し，仮設2を部分的に支持するものである。つまり，日常生活に関係した出来事については，性，経験，発達に関係なくドロップアウトは継続者よりも内的で安定的で全体的な次元へ帰属する傾向を持つがトランスファーは全体的—特殊的な次元への帰属ではドロップアウトよりも楽観的に帰属を行い継続者と同様な帰属傾向を持っているのである。そして，スポーツからドロップアウトすることなく，トランスファーすることでスポーツ活動に留まる者は，日常生活のよくない出来事，失敗的な出来事の原因を普遍的なものとして帰属するのではなく場特殊的なものとして帰属する傾向をもっていることがわかった。

4．結　論

運動部での出来事については，性差や発達差による影響は受けるものの，全般的には継続者よりもトランスファーが，そしてトランスファーよりもドロップアウトが運動部での負事態の原因をより内的で安定的で全体的な次元へ帰属する傾向のあることが認められた。また，日常での出来事については，ドロップアウトはトランスファーよりも内的で全体的な要因へ帰属しやすい傾向はもっているが，安定—不安定な次元への帰属ではドロップアウトもトランスファーも帰属傾向は変わらないことが明らかになった。以上の結果に学習性無力感の理論を当てはめて考えると，ドロップアウトやトランスファーは負事態の原因を悲観的に帰属するスタイルをもっているためにひきおこされる可能性があり，Seligmanら（1990[15]）が述べるように，スポーツ指導の現場において，このような悲観的な帰属スタイルを変化させていくことを目的とした介在がドロップアウトの問題に対する一つの解決策となり得る可能性のあることが示唆された。特に，よくない出来事，失敗的な出来事が起こった場合でも，それに対して楽観的なものの見方をする事が，粘りを生み出すことにつながるものと考えることができる。そして，男女別に単純主効果の検定を行うと，継続者とトランスファーの間に有意な差が認められない場合があること，発達別に単純主効果の検定を行うと，大学生では継続者とトランスファーの帰属傾向に有意な差が認められない場合があることなどから，帰属傾向をドロップアウト，トランスファー，継続者の説明変数として考える際には，性や発達による影響に留意する必要性も示唆された。

引用・参考文献一覧

1) 青木邦男,「高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因」体育学研究, 34-1 : 89-100, 1989.

2) Burton D. and Martens R., "An explonatory investigation into why kids drop out of wrestling," Journal of Sport Psychology 8 : 183-197, 1986.

3) Gould, D. Feltz, D. Horn, T. and Weiss, M., "Reasons for Attrition in Competitive Youth Swimming, "Journal of sport Behavior, 5-3 : 155-165, 1982.

4) 保坂かおる, 杉原隆,「競泳選手の記録の変化と Learned Helplessness との関係」スポーツ心理学研究, 12-1 : 16-21, 1985.

5) 稲地裕昭, 千駄忠至,「中学生の運動部活動における退部に関する研究：退部因子の抽出と退部予測尺度の作成」体育学研究, 37 : 55-68, 1992.

6) 伊藤豊彦,「スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質」体育学研究, 30-2 : 153-160, 1985.

7) 伊藤豊彦ら,「スポーツにおける原因帰属様式の年齢的変化について」島根大学教育学部紀要, 19 : 57-62, 1985.

8) Klint, K. A. and Weiss, M. R., "Dropping in and dropping out : Participation motivesof current and former youth gymnastics, "Canadian Journal of Applied Sport Science, 11-2 : 106-114, 1986.

9) Klint, K. A. and Weiss, M. R., "Perceived competence and motives for participateing in youth sports : A test of Haeter's competence motivation theory" Journal of Sport Psychology, 9 : 55-65, 1987.

10) Mcpherson, B. D. R. Marteniuk, J. Tihanyi, & W. Clark, "The social system of age group swimming : The perception of swimmers parents and coach," Can. J. Appl. Spt. Sci. 5 : 142-145, 1980.

11) Orlick, T. D., "The atheletic drop out : A high price for inefficiently" CAHPER Journal, 41-2 : 21-27, 1974.

12) Orlick, T. D. and Botterill, C. B., Every kid can win, Nelson Hall : Chicago, 1975.

13) Peterson, C. Semmel, A. von Baeyer, C. Abramson, L. Y. Metalsky, G. I. & Seligman, M. E. P., "The Atributinal style Questionaire," Cognitive Therapy and Research, 26 ; 287-289, 1982.

14) Robinson, T. T. and Carron, A. V., "Personal and situational facters associated with dropping out versus maintaining participation in competetitivs sport," Journal of Sport Psychology, 4 : 364-378, 1982.

15) Seligman, M. E. P. Susan Nolen-Hoeksema, Nort Thornton, and Karen More Thornton, "Explanatory style as a mechanism of disappointing athletic performance," Psychological Science, 1-2 : 143-146, 1990.